

kurenai

56

寒 冷 地

田 中 克 己

彦根「みづき」歌會席上二首

寒冷地手当千円まへに置きもだせる妻をわれはにくめる
クリスマスツリー明るきへやの中をとめはあれどわれは歌はず
雪埋む越路に近き一冬をわが世のうちに加ふべしとは
歳末のざはめき立つる市の灯にまなこかはして別れ來しはや

昭和二十六年

あふみの湖うみながるる水の京にゆきなには行くと思へばうれしも
雪國の雪の下しもふえほのぼの息かよはせて語らんと思ふ
わが心こごゆるときしこの國のこほれる土に眠り果てむを
をみな子に似たるものいひするをのこわれをめぐりてあるが如しも
若狭より積み越しかれひ食みながらゆくすゑおもひ妻はなげくらし
降りつもる雪のとぼそを叩くひとけふもなかりき歌つくぬれとや
うたうたふ雲雀のごときわがまなこ春めく空を見るはうれしも
指折りて會ふ日かそふる京をみなには乙女をわがこふらしも

ひ び き

山 口 實

遙かなるひとと思ふに身に添ひてよみがへるゆえにひとひ歎きぬ
紅あかき葉の散りしく下を去らむとぞおもへば影にまぼろしは顯あつ
なにやらむ消えゆく闇を見つめつつ疲つかれはてては酒のみにけり
淡あは々と照りて彩いろなき秋の陽は石垣に染みて晝ひるふけしなり
みつめられしわれのころをゆするとき響ひびきかすかに手につたはりぬ
何となくさびしくなりて坐るときレコードの光澤つやもこよひ眼に染む
涙の眼とちてしづかにひらきたる愛かなしき顔にわかれ來にけり

生きるすべもわが知らなくて生きてゐるこの不様にマリヤは笑みて
冬の野にあえかに匂ふ花咲けどねがひし日かなマリヤはをらす
何事もいましめくれぬマリヤにて春まだき野に花堀り花堀る
意地強き小き男のかたがけに氷のとけてゆるむはつ春
誰彼のきたならしさをののしれば黄昏はやき雲流れ
心素直に雪やららん降れ降れとうたはん声の空しがるべし
手袋のままに握りし新雪を投げ上ぐる野のとほく昏れつつ
錢湯のあかきのぼりは雪ふかき街の夕べにとりのこされぬ
如月の夕映えに立つわがまみの血にじむときを鳴く夕がらす
廣々と野は榮ゆめり芽よもぎのわかきを摘みてかへらざるべし
春の水の流れのほとりわが立ちて花さらし芒に湧く雲をみつ
山は枯れ空はうつつなり春まだき里のあげひばりかな

曼珠沙華の幻想

吉 田 辰 雄

まんじゆしやげ月夜の墓につづきゐる風ふきくれば影をひろける
まんじゆしやげ河の堤にくだけつつ今年の秋の赤きたそがれ
まんじゆしやげ遠くつづけるしぐれ路に眞白き羽を失ひける
まんじゆしやげくだける夜は土手にきて雲よりなほく風に吹かれつ
まんじゆしやげ一面に咲く野にあへば川ひとすじをへだててゆきぬ
まんじゆしやげ心の中にしきつめてみじろぎもせず人を許しぬ
まんじゆしやげ流れる河に昏れゆきて憎みしひとを忘れゆくなる
まんじゆしやげあかあか咲けばただ孤り坂を登りて道を違へる
まんじゆしやげ掃溜捨ての河邊を眞赤に染めてはばかる勿れ
まんじゆしやげ墓から村へつづきゐる道を下ればはやくたそがれ
たちこめし濃霧はれば曼珠沙華いきいきとしてしすくたりつつ

秋 空

浅 田 照 子

こんなにも大きくなりし子よと云ひさしあげてやる秋空の青さ
鶏頭の紅き葉脈にたまりたる朝露光りて並びたるなり
秋晴の山くんだり來し人の服に油るのくの匂ひたりけり
過ぎし日は埋れる思ひさくさくとふみしめてゆく朝の雪道

雪 あ かり

平 田 信 子

病室の窓に明るく冬陽さし静かな風のきこゆる日なり
静かなる母の寢息に安らひて樹木をわたる風きいて居り
一途なるわが歩みをばみつめてさびしと思ふ冬日の昏れに
何一つ汚れざるなしたばかりてここに生きゆく人への憤り
かたくなに一つの殻にとちこもり堪へてある日の吾のみぢめさ
心に觸り許されればかたくなと知りつつ君に遠ざかりゆき
うちにひそみ愛憎の思ひ盡くるなし生きゆくことはたかひに似て
悲しきは鈍色の冬に凍みつきてもの言はぬ人を憎しとまでも
さびしかる冬野をゆきて孤獨なれ誰に捧ぐる歌一つなし
降りしきる雪の下べに埋もれて暎きは遂に現るなかれ
たくれとなりてうちにも灯をとすわれにやさしきこの雪あかり

口 笛 の 雲

岸 田 エ 子

朝まだき誰が吹くやらむ口笛の風にゆれつつ細きこゆる
山ぎはの気味悪き雲あふぎては心の暗き一日となり
暮れてゆく夕陽にたてば明日の日の有りと知りつつ淋しさ増しぬ

出 雲 路

難 波 禮 二

鳥取を過ぎてしばらく白砂の丘に引きたる稜線のみゆ
兵なりし君が銃とりかけにけむ砂丘かなし松青れれど
砂山の白きに映ゆる血の色のはげのもみぢは泌みて思はむ
ひろ湖の波音ひくくよするなべ入江はうすむしろき水泡に
芒穂の山なびかひて伏したるも光りは返すしぶきの間に
幾旋回鉄のはしごを降り來てたなごに熱く海に對へり
入つ日に反射さびしき湖の町は小さき山を背にして
大山の山の頂き覆ふ雲ひと日うごかす逝く秋のたび
大根もて道の行方を教えたる人をしてしみ過ぐるこの聚落

耶馬溪素描

山 口 實

秋もはりの或る日に豊後の森町に早朝六時半頃に汽車で着いた。

車中の窓より見てみると、雪がふつたように見えるほど眞つ白な霜の野をうすくねるに染めつつ太陽がだんだんと昇つて行き扁平の岡の片面が眞赤にかがやいてゐるのをトンネルを出た瞬間見たりなごしたのも印象的だつた。その日は朝の間は風は無くつめたかつた。「心なき身にもあはれは知られけり」このような感じのする朝でいつも僕をなやます愛慾なき言ふものはかまがる仙境ではほとんど湧くひまが無かつた。

深耶馬溪の手の小さな茶店て無理に朝めしをこしらへてもらひ白い飯をさらさらとお茶で流しこんで柿を五つ六つそれにゆて玉子三つばかり靴に入れて身ごしらへを整へて諸國修行にでもゆくように勇んでのれんを分けて表へ出たのだつた。

深耶馬溪の紅葉のちりかか軍艦岩の寂然とした風景などはバスの中より眺めるだけでがまんした。深耶馬溪は特筆すべき絶景とも言ふべきものは無いがゆふぐれさびけるほろと鳴る尺八を聞きつつ散りゆく紅葉を見るなれば東洋風の夢幻の世界にでもひき入れられるような氣持である。

一時間ほど其処で休んでバスで柿坂まで行つた。所要時間は一時間余り。柿坂より三里のみちを山國川のほとりを歩きつつ羅漢寺へ指して歩いて行つた。正午の太陽は山國川の眞上にかがやきあくまで澄んだ空はふかいかなしみを誘ふようだつた。

僕は山國川の河原を歩いたり街道を歩いたりして旅のころのおもむくままにいろいろのことを追憶した。『秋たけし山國川のほとりなるほこりまみれの菊を手折りぬ』瀧なして流るる波の中に立ちふたつの岩はかがやきわたる』

かかる歌もこの河原で苦吟してつくつたのである。三日月神社に着いたのは一時頃であり、裏山より吹き來る秋風の中に立つてまたしばらく考へごとをした。禪海の墓に來たのはゆふぐれ近くであつて洞門をうがつた斧、槌等が暗い洞の前の机にのせてあつた。禪海苦行の

繪巻物などを見てそこを辭し松風の吹きすぐるみちを曹洞宗の古刹である羅漢寺の坂をのぼつた。

山門をくぐつて坂道をのぼるあたり中里介山の書くところの大菩薩像を思ひおこさせるに充分な感じのするところであり、僕自身が机龍之助になつたのではないかと錯覺をおこすほどであつた。

黄にかがやいた銀杏の大樹の葉は生命のあはれみを押しつけるごとくひとひらふたひら、かがきながら地に舞ひ落ちてゐた。羅漢寺の本堂は残念なこと三、四年前の火事で焼けた。

崖の上なので水の便が非常に悪く見る見るうちに焼けたさうだ。この寺は実に佳い寺でありこのような素描の文章では簡單に言ひあらはされない。崖の中腹の大きい洞には五百羅漢がならび山門のみちは稲田を抜けて山國川、跡田の川に通じ老松は下よりこの寺をとりまき、夕霧はしづかに戸敷わづかの川のほとりの村をつつむのだつた。

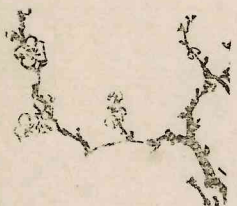
その夜山國川のほとりの宿にひとりさびしく寝てあくる日は青の洞門で川の流れるながめつつ半日ほど遊んで五時の郵便で洞門を去り中津市へ出た。(二六・二・一九)

くれなる雜記

○またこゝに三月はめぐつて來た。美しい花の咲く日も間もないこゝ、春はたのしく我らの歌をうたはう。

○「くれなる」は絶対不動で幕進をたづけてゐる。とは云ふものの極めてささやかである。整理しやうい様、紙型をちぢめた。二頁づついつかは加はつてゆくであらう。

○原稿は折返し送付のこと。手数をばぐため自動的に送られること。



KURUMAI

57

春の小流

埜中清市

何見むとしもなく佇ちて春めきし山よりくだる水にむかへり
春山よりわきて流るる小流れの音さやかなり日は照りながら
山手よりしづかにくだる浅き流れに水垢はゆれて春陽に照りぬ
音もなく山瀬の村の細き道に沿ひ下る水の春の小流れ
空罐のレツテル赤し春の日のあかるきひるの流れに沈みて
小流れの石のあはひに沈みたる水鉄砲にあつまる春陽
日あたりのよき山川の石垣に咲くすみれぐさ色も早くして

春の一日

春の日は心足らひて志賀の湖のいさごに遊ぶ妻子をつれて
漁り舟にたばたほと鳴るさざなみの志賀の春日の濱に坐れり
春日とほく霞めるひるをあふみ路のいさごに妻子とくひし茹卵
わづかばかり比良に消残る雪みつつ愉しむ春陽のまぶしからなく
突堤に子ろの手をひき春雑魚の背を光らせてあそぶをみつつ
波にゆるる埠頭に立てばふくらみし春山うみの向ふに低し
瀬田の唐橋近くし見えて近江の湖や泛ぶヨットの動かざるに似て
濱にしてリンゴの皮を齒もてむき子にあたふなり春日の灘に
はしやぎて車窓にあそぶ童女の眼はかがやくつ春なればこそ
石山寺の石ふみのほれ木もれ日に白く輝やくをふみのほれ子よ
泥船の泥かき上ぐるひびきさへ春はのどけきしがの唐崎
ほのかなる比良の夕ばえ仰ぎつつ子ろの手をひき急ぎたりけり

ほのぼのと朝床の上にめざめつつなれをおもふものいはず来て
あたたかき春のゆふべはへやのそとはしための泣く宿に泊りつ
みづうみのなぎさに立ちて夏の日をおもへばかなしひとはまた来じ
ねぎ味噌をあへし豆腐をはみつつもうたつくりたくわれはなりぬし
北國のかどぐちにあるまちにゆき心かなしくわれはをりたり
去るわれをとめんとべしなれが手のあたたかかりしいまも忘れず
わがために涙おとして送り來しひとは眠りにいりにけらしも
春あさき老蘇の森の下草のひめたることはいはでわかれぬ
風寒き淀のながれにそふるわ指ざししこといまは恥づるも
あたらしき庭に三本の櫻花植うるよきのふひとは來りし

春の感情 難波 礼二

愚かなる者の悪夢とあらはには言ひ去り難しこの一年は
装ひを春に交へたる汝を見てこれよしと言ふ安堵を抱き
水仙の芽吹くと見しは何時なりし四月の朝をいまだ開かず
美しき乙女の胸のふくらみを見つつかかりのなかに羞らふ
煩惱に迷はされしと思ふかやみどりの黒髪掌に觸れて泣く
命ありて生くる限りの淋しさを櫻散る見つつ堪えてゐるかも
息絶ゆるものの叫びを吾が耳にただに聞きをりその叫び音を
雨の音地につくときにかすかにも再び声となりてつづきぬ
また逢はむ日こそあらしめ夕せまる巷の風に君吹かせつる

愛しきもの 平田 信子

声あげてためらひもなく笑ひたり児童とある時のわがすこやかさ
冬晴れの朝を明るき瞳して児童と走るなり土堤道遠く
健やかに伸びゆく生命まもりつつわが生くる日の幸ひここに
双の眸の清らかなれば澄むひかり永久なれよこの少年愛し
幼くて恃むならねど或時は心かなしく兒に依りてゆき
くづほるる思ひに觸れて愛しきは幾多の小さき命なりけり
わが歩む丘は明るき早春の松林なれ旅の戀ひしき
春近き朝の陽ざしに遠山は匂へる如しわれの想ひも
さやさやにりんご噛みつつその音の夜雨にとけてゆくを想へり
さ夜更けの頭痛にひびき呻くごとくしるが如きは何の音ならむ

長崎 山口 実

アンジェラスの鐘に昏れゆく西空の色はもかなし長崎こは
尼僧院の屋根吹きさぐるさむ風をさびしよと誌しけふはくれゆく
長崎のをとめ戀はしむ心からこひしよとおもふ前髪少女
銀の平打にぶく光ればたそがれのころろ乱れてまた君に寄る
山の麓の銀杏の森はあざやかに黄に燃えたちて秋を憎みつ

椎の若葉もまなこに痛しかくばかりよごれてゆきしわが愛情は
うつろなる心にぞ染む白梅の咲き満つる書の日のもり空

現代名歌選 (その一)

今般「短歌聲調社」から創 あり、しかも貴重である。 順次編むこととし、以て
刊一周年記念として「現代 ここに有名、無名を問はず 世の批判に訴へることと
歌人名辞典」が刊行され 名歌とおぼしきものを抄出 した。
たことはまことに有意義で し、結社を超えた名歌選な

山口 實選

あめつちにわれひとりあてたつこときこのまびしさをきみはほほむ 會津 八一
雲重く風堂に垂るる午盾夏柑の香り君が指より 赤松 天畝
硝子戸のそとのくもりはをりをりに雨をふらしてまたしづかなり 淺野 梨郷
麥畑の青きが硝子の窓に見え日暮れてゆくしづかなる雨
河の水にくもりながらにつつまれてゆれつつ位置はかはらぬ日の影
くもり日の雲のなかなる光りにて波にもまるる流れひとすぢ
梅雨のあめ日昏れて寒しくさむらのごくだみの花臉にのこる
すがれたる心の空洞を風ふけばこの風の行方見つめがたしも 芦穂 瑞子
初夜の夜の焼けゆく部屋をV字型に射し入る光をわれら見てあつ 安良 田濟

いささかの慎しみはあり二重橋背景にして嬌とうつり

有富 星葉

しらびらさ夜を流らふ雲あれば萩乱れ咲く夢かぎり

池田 道夫

あるまじき紅かな墓地にめぐり立ち首かつ切れる漆木のむ

石川 信

れ 雨こむる谷にうごくは雲か霧か山の青葉にいまやせづふ

泉 幸吉

月あかき部屋に吊りたる青蚊帳に海風吹けば大きくくむ

植村 武

制約にしびれしごとしかたくりのかげりもあらぬ花にむか

生方たつる

へば したがひて二十五年の長き日よ髪しるき君さけふの山行

大場 寅郎

昏れてなほ淡潔船の音ひびき明日あればわれ何と思はむ

全

花と降る恩愛とおもふ眩ゆきの夢ならぬ夜の風わけてゆく

大橋 茂代

われとわがもてあましたる心にて酔ふといふことの寂しく

大橋 松平

もあるか 千分の一ミリを追ふメーターの微動の中にある面影や

岡村 一郎

おほてらのまるきはしらのつきかげをつちにふみつもの

會津 八一

をこそおもへ 朝となればまたあたらしき響あり聴き明したる山川の水

青木 礼子

心ゆくばかりの喜び一つわれにあれ淡々と美しき夢も見ぬ

東 博

夜々 十薬の花ゆふ闇にしるきまではびこる庭にわがおり佇たな

飯田 英良

歳月を逆にもどして愛しけやしまいとたびのわが生もが

筏井 嘉一

な ひと冬を足るといはねど日溜りにねぶかをかこふ庭の狭き

五十嵐 肇

に あるまじき紅かな墓地にめぐり立ち首かつ切れる漆木のむ

石川 信雄

れ しづかなるよろこびありて灯のともる厨の棚に花などを置

石橋 静子

く 白鷺が向つ田につくよるこびをおごるきとなして新しく住

泉 甲二

む 虫はみて枯れゆく硝子の下陰にこもるふ影を妻は知らずも

市原 正一

草の上を萩風わたりゆきし時嬰兒とわれと笑みてあたりし

井上 彰

海いろに空かがやけばあたたためて遠かに恋ふるもの胸にあ

生方たつる

り 俤と言ふほどもなく七輪に鯛のあぶら香たてて燃ゆ

漆原 郁彦

赤き帯しめて極に眠る子を忘れて思えや生きの限りは

江口 漁花

あけび陽に照りながら山深く筒鳥なきて春ゆかむとす

江藤 光風

空地には秋の光のあまれくて毒ある草も実をむすびたり

大坪草二郎

われとわがもてあましたる心にて酔ふといふことの寂しく

大橋 松平

もあるか ふるさとの桃咲く村を見しむとぞ妻を伴ひ春旅に立つ

阿野直七郎

愛憎は彼方のものと思ひしにをとしめられて燃えたついか

尾崎 孝子

り 松風に青草なびく岡越えて日のまだささぬ磯に來にけり

尾上 柴舟

KURUMAI

58

妙高の雨氣定まらぬきのふけふ立葵のはなはわが眼を奪ふ
 かなしよと言ひ放ちたるたまゆらの天龍峽のあけがたの月
 朝の陽の彩なす條に透りつつ青高原よ霧はれわたる
 沓掛の愛しき女のおもかけは佐久の日ぐれの燈にうかびつつ
 はなやぎし一夜の情は沓掛の曉のさ霧とはれわたりゆく
 長崎旅情(その六)
 彩玻璃のそとの月夜は枯れし葉をしきりに降らしたまたしづもりぬ
 長崎のいへの疊のほひさへうらかなしよと茂吉は言ひつ
 切支丹殉教の繪図に近寄りて君と語りぬこのゆふぐれに
 聖母無原罪そのきよらけき御姿を胸にいだきて死にゆきにけり
 消ゆるがに心せつなくもだゆるを消ゆるにあらじこの霧の夜に
 たたへまつりし聖母マリアはうつしよに生き給ひたり六十三年の間
 幽かなるあかりとなりて照りいづる三元后憐れみの母の夜の祈りよ
 土曜日アメンジュウス様・日曜日聖ミゲル様と誦へをばりし七夜の祈り
 しろがねのつめたき神の御像もアングエラスの朝の鐘ききたまふ
 犯したるわれの心のかなしみはなびかふ川の藻に魅かれつつ
 亡きがらの灰にのこりしロザリオの鎖をわれに示したまひき
 月光のごとしと言はむ日光のかがやく果に澄みゆくが見ゆ
 月のまはりに五つの星は生れ初めて大浦の丘の空くれむとす

長崎・信濃

信濃旅情(その二)

山口

實

くれなる
 第五十八号 印刷所 株式会社朝日堂 印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町 吉川清司 發行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ一二一 くれなる發行所

わが友ら城山の上のうちつごひひかたる日ははやめぐり來ぬ
みづうみの冷きいろをかなしみて去りにしわれを忘るるなかれ
苔かづらまふ岩かげなとれば神々のごとおもほゆるかも
かの丘にまなこをとじて眠ります牧羊神を想ひつつゆく

故郷を戀ふる歌(一) 西 保 惠 以 子

大雪の日に数機來し空襲が冬の記憶の最後となりし
釘問屋の主人もかなしからむかや場末の市にいま賣るときく
うすももに花を散らしし祭衣幼な衣裳も戦火に果てし
戦のひもじき時に飯分ちし隣のひとも消息をたつ
焼出されし日に身につけて來し服の六年のけふは雜巾となれり

東 辺 遊 抄 (一) 難 波 礼 二

楓若葉重なり燃えて彼方より觀樂の歌声を遠くにききぬ
何かしらに逆らふ氣持ありつつ人群にもまれてこんな處へ
三原山おのれあやしく煙吐き高くかくらふ其の焰の中に
斯かる時斯く振舞ふが若きらの誇りと言へば淋しかりけり
由井ヶ濱ありし昔を思はへばわがゆく道も水底らしき
刻々と変る印象を眼にやきつけ少し落つきわれ歩きぬ
海蝕にえぐられて黒き岩塊の頂にわれの小さく立てる
富士の嶺の白雪光る朝空になみよるふ山のひだの美しさ
あわただしく旅を來しかど雨の降る伊豆の宿りを早くするかも
ものかげにひそかに涙ぬぐひぬる人よ平凡な日本の女
若葉映ゆる中に湧き立つ湯の音の止むとしなけれ人を浴ましむ

昨 日 平 田 信 子

胸ふさぐ思ひなれども今更に過ぎゆきし日は言ふべきならず
心とぞし寄方なければひとりして雨晴るる山に向ひて居りぬ
人を頼み信じたる故幾度かつまづきしわが歩みなりける
雨降りてさびしき日なれさはあれど誰戀しとも思はざりけり
赤い桃咲きぬと歌ふ兒に和してわがみぢめさは言ふべくもなし
青き空白き雲なり野に寝ぬてかなしくかへる思ひありけり
誰も彼も信じられねば声あげて泣きたることのいくそ度かも
傷ましき思ひは遂に消ゆるなしようめきつともゆかねばならず
野の涯の遠い空ばかり眺める瞳には何も映つて居らず
黄にこほれ山吹の花の咲くみれば昨日は靜かに過ぎゆきしなり
晩春の小さき流れに佇ちてわが素直に生きてこし日をおもふ

ものうさ 吉 田 辰 雄

ほらあなに水の滴がひびくなり何時の世からの嘆きのうたぞ
蛙なく月夜の風に散りつれ杳の花のおごり咲く夜を
おぼろ夜の蛙の声にちりゆきし白き杳は忘れえぬかな
蛙なくたらたら坂にこぼれつる杳の白き花ふむ月夜
若草をころがりにつつ笑ひける春風の子の足の白さよ
梅のにはひ風にまかせてただよへばかへらぬ人の戀しかりける
うすぐらき林の奥にま白なる辛夷散らして春の老ひぬる
しめつほい夜風が吹けばなき交すくる蛙はまつはつてくる

伊 井 玲 子

はつなつのみごりのいろもかぐはしく乙女となりて梳つるかみも
燃え上る落日のごときわがおもひ君の名をよびさびしさをけす

惜 春 埜 中 清 市

れんげ咲く田圃の中に親と子と花摘むときを啼く牛のこゑ
乳牛のはだら牛あそぶ春山を仰ぎてをりぬ心たのしく
孟宗の藪はさやかす黙しつ々笊堀りは春を惜しめり
天青地白母子ぐさなど黄色なる花も摘みけり春を惜しめば
眼には青葉したたるばかりに耀よへば子を呼ぶ声もやさしかりしか
和毛なす穂の芽があり刺さへにやはらかければ寄りて見にけり
心たかくあらむとしつ々春山のうまさ青葉をわけ來つるかな
さんほうげ咲けるをふみてくだりゆく夕山かげに落つる日のいろ
菜の花のはや過ぎなむとする野べに音なく降りて暮れゆかむとす
埃づく足を運べば逝く春をおぐる夕べのかざろひのいろ

ひしひしと慕情せつなき幾日かも川邊の芽柳ほはけ過
ぎたり
さびしさのやるかたなくて次々に立てし炭火の赤々と
燃ゆ
かなしみも悔も靜かにあらしめて春めく池の面をみて
をり
ひそやかに居りしもつつじもえくれれば決めしおもひの
ひしがるるばかり

れんじ染むるつつじの眞紅のあたらしく初めて知りし
朝を思ほゆ
オルガンに紅葉の若葉映ゆるとき童の声はすみとほり
たり

夕迫るころまで子らとあそべども吾がかたくなに涙あ
ふれつ
深緑したたるばかりの森かげに木もれ陽を背にかにを
取る子ら

子らのため山井の清水くめるとき初蟬なけり山陵の森
双の眸に青葉うつして語りたる友なり友の夢にしあり
けり
ある限りつつじ咲くとき狂はしくわがあこがれのもえ
あがりつつ

現代名歌選 (その二)

山 口 実 選

足柄の嶺に立つ虹の顯はれて人みな知れり吾恋ふらくを
わが夢は現となりてきびしかり田居のすみかに枕を並ぶ
蛙鳴く相模の田居にわが妻もおちつくことを疑ひ度くなし
わが門の山井の水にこてまりの花を浸けたるは妻かも誰かも

互みなる嫉妬のなかにたもちゆく平衛よ夜の新樹かがやく
木 俣 修

葦細く伸びし桔梗の重げにも傾きてもつむらさきの花
石に添ふ秋海棠のおもしろき葉を重ねては花もたむとす
窪 田 空 穂

年わかきふたつのいのち相寄りて抱擁く三十秒を尊しとする
河 野 慎 吾

蚊屋の外にうづくまり居り緑色の黎明となる庭を見つめて
稀々に吾が立ちゆきて見つけしものをだまきの葉に蝸牛ひとつ
土を打つ雨ははげしき音となり瓜をひやして夜の時を待つ
かばひくれし事を負担と思ひしも仕事かはりし二日か三日
小 暮 政 次

遠目にはさみしく白くこもり咲く何木の花か付ちて嘆かふ
小 高 美 沙 子

かけ足に春すぎゆきて若き娘の髪もひとみも風にとまらぬ
五 鳥 美 代 子

いてふの葉風にもまれにほふ夜の窓にして一人怒をこらふ
見え來る星光くらし日すがらの暑き風の夜につづくとき
颱風の外れてきびしき日の光思ひぞいづる子規の日けふを
五 味 保 義

柔和なるものの無数を信ぜむに故なき涙吾に湧くかな
近 藤 芳 美

KURUMAI

59

生駒山上天明山吟詠

山口実

相共に一夜を寝たるこの人を父かとおもふ山ほととぎす
 亡き父の寂しき声を思ひいづ二十年を経しこのゆふぐれに
 あはれなる心の中に散りゆける薊のはなのうすきむらさき
 峠にて澄める心はゆふぐれの赤きひかりの中にかがやく
 白川にとろとろなる夜の水の消ぬがに去りし女忘られぬ
 日の前にいま止りたる扇風機の黒きつばさもわれの眼に染む

燈台 浅田照子

潮風にまつはる髪をなほしつ心すなほにカメラに向ふ
 旅の夜の夢清ければ波の上の朝焼け空の火雲目にしむ
 ゆるやかに流れぬし彩雲ちぎれゆき我が空想のやがて消につつ
 よこざまの烈しき雨に打たれつつ海抜数十尺の燈台に立つ
 ましろなる燈台に立てば傷つけるものごとく海は狂ほふ
 若葉する波切の海の潮騒は天地おほひびかひにけり
 ゆゑしらす胸たかなれば岩をかみ潮なりどよむ岸に寄るなり
 若葉する山かけいくつ越えしかや海くろぐると前にひろがる
 群がりて咲くくれなるの花を見ぬさびれし漁村の小さき流れに
 五月雨のしづく車窓にしげくして若葉する山迫りたるなり
 あくがれてとほくたづねし青海よ心足らはず今はかへらむ
 さみしさや帰る車中に手みやげの伊勢海老は音をたててうごけり
 子等かへしうつつ心にしみるもの部屋すみに活けし笹百合にほふ
 いまもまた我が行く末をうれふれば母の白髪のうす陽に光る

くれないの 第五十九号 印刷所 株式会社朝日堂 印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町吉川清司 発行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ一二 くれいの発行所

ここにきてまた逢ふべしと思ひきや太平洋の波青くもぞある
 すすくと麥の芽伸びるこの朝け三原の山は煙吐きけり
 ふる里の父母をおもへばうす暗く涙のごときひとの走れる
 わがぬかに觸れてぬくとき湯のけけり流らふ見れば山深く來し
 久々に仰ぐものから白雪のかはりなき富士よこのうづせみに
 伊豆の山夕やけの空茜さすを旅の船の窓よりぞ見る
 白き波吹ゆるがごとく岩にたち岩にくだけて岬は鳴れり
 斷崖を這ひ反り散れる波の光り城ヶ島に陽は寝びわたる

故郷を戀ふる歌(二)

西 保 惠 以 子

なほつゞく戰禍を誰に怒るべき兵より還り見病みましぬ
 はぢらにもなく焼けざりし親戚にシヤツをもちひに行きし父はも
 駐兵が來ると紀州の山深くのがれしかぐるきもんべをはきて
 白米を食うふる日をば云いあいて慰めぬしか母とその子は
 いら大豆後生大事と入れし壕かの空襲もながくありしか
 配給にとほしき魚を母とゐて分ち食べたる日も忘れず

ひるがへる

埜 中 清 市

ふるさとの夏山低く眞日に照りひるがへるなり嘔すべきかは
 ほととぎす來鳴かずなりし麥畑に語らず父と鎌をとぐなり
 黒土にれんげの種子の落つるにも心はかよふ時ならずして
 薊さへ花のすぎたる六月のしらじらしき日に麥を刈るなり
 明るめる書のかぢちぞ麥生のはてに虹かさなりて懸れと希ふ
 麥わらを焚ける煙が夏山の裾ひく夕べのむなしき云はず

くにざかひ生駒の嶺にひるがへる山燕追へり子供らと來て
 ふるさとの大和の國の山なみの青かりければ心はづめる
 見はるかす國はろぼろし初夏の風はおのれを吹きてさまねし
 吹く風はこの山なみの果にしてとほくけぶらふ國さして吹け

蛙なく夕べとなればゆきてみむ月見草白き橋のたもとに
 螢呼ぶ声にこたふる声はなし茶種幹の掃しろくながれて
 螢追ひてあそびし月もがな日淡き夕べは麥生を越えてゆきけり

大和通信

堀 辰 雄 氏 に 田 中 克 己

その後御無沙汰してゐますが、お休いかゞですか。私の方の様子
 はこの間「太平」といふ雑誌にこんな詩を書きました

僕の畑

分け與へられた十坪の地を耕しながら
 なにを蒔かうかといろいろ考へてゐる
 大根は蒔いて三日目に発芽し
 葱は株のままなので翌日からしつかりしてゐる
 隣の人の畑を見ながら僕はまた考へてゐる
 子供たちが欲しい甘いもののため
 甜菜を蒔くのはどうだらう
 病氣のやうに自分の欲しいが煙草の種子を
 おかみに隠れてこつそり蒔かうかしら
 鋤く手をやめて僕は考へてゐる
 子供の時に作つた畑のやうに
 薔薇やヒアンスや櫻草など
 美しい花ばかり一面に咲かせてみようか
 ことしは朝顔の花を見なかつた
 朝顔畑といふのはないかしら
 僕は鋤く手をやめて考へてゐる
 こゝは家から遠くはなれてゐるので
 お父さん食べ物のことも考へなさいよと
 怨めしげな顔をする妻もゐず
 暢気な詩人になつて僕は考へてゐる

「考へる農夫」といふ題にでもしたいやうな詩でせう。序でなか
 らこの農夫は實際には何をしたか附加しておきませう。十月一日、
 人蔘を蒔きました!(昭和二一・一〇・三)

故郷を戀ふる歌(三)

西 保 惠 以 子

大きなキャンパスにわが描きたる街は焼けたり繪ももろ
 ともに
 なほのこる感傷としも家あとにひらひし焼石をわがすて
 かねつ
 夕べ夕べ兄が弾きたるオルガンの夢にも通へ夜の稀々に
 逃げのがれ橋の下にて朝を待つ劫火は赤く思へばかなし
 も
 家並のやくるを見つゝ泣きてゐるし若き兵士もありしぞか
 の夜は
 わが住みし安堂寺橋通りを戀い來しに顔知る人のいま住
 めるなく

現代名歌選(その二の下)

埜 中 清 市 選

ここだとも花をつけたるコスモスの風のみだれにたえざ
 らむとすも 片 桐 顯 智
 山の湯に來りて心ゆとりありひさしくおもはぬ人をおも
 ふも 加 藤 源 藏
 この螢の向ふむきなる背の硬さ晝かたくなに夢さへ包む
 門 野 高 子
 武蔵野の空ゆく雲のはるばるし藁屋ののきの夕かげはふかみ
 金 子 薫 園
 秋めきて渡らふ風に蔭ふかくばらの挿木の若芽がたちぬ
 金子信三郎
 果てしなき野の広がり吹くなべにりんごの花の雪と散
 るらむ 嘉 納 と わ
 みなひとがおなじものいふ寂しさをささむるときはいか
 にせむとか 神 山 裕 一
 二つの命相よりそひて生きこしはおのづからなるかなし
 みに似つ 川 口 汐 子
 わが夢は現となりてきびしかり田居のすみかに枕を並ぶ
 川 田 順
 みちのくの大更村の假住居かりそめならす老いし吾はや
 菊 池 知 勇
 突放されし貨車のとまるな見とどけて夕べの散歩のあゆ
 みを返す 久 世 正 富
 石に添ふ秋海棠のおもしろき葉を重ねては花持たむとす
 窪 田 空 穂
 柳川の瀬波はしろくかがやきて岸に榮ゆるぎしぎしの花
 久保田不二子
 菜の花のすぎで麥生にまぎれしにわがあげくれなれたぐへ
 も云はず 熊 谷 武 至
 踏まれたわがたがやさむ土のあり畦よりあふれげんげ咲
 きみつ 黒 須 忠 一
 岩の上に高あぐらしてまねきなば寄りても來べき秋の雲
 かな 小 杉 放 庵
 のでん風呂にひそけく入りて打仰ぐ空をしみじみ高しと
 思ふ 小 松 つる 子
 柔和なるものの無数を信ぜむに故なき涙吾に湧くかな
 近 藤 芳 美

くれなる雑記

長雨の去りゆくころから、一汗一汗の苦しさが味はへる様になる
 のです。幾つもの峯をふみしめながら、ただ眼の前の、時には向
 ふの峯に細くあかく見える道を、仰ぎつつ歩いてゐます。
 果してこの道はあすこに通じるのだらうか。君、君、ぼくらはこ
 の道を、だまつて歩きつづける事だけが仕事ぢやないか。この岩
 石も、この草木も生きてゐる……さびしいことなんかあるもんか。
 空気がたつて生きてゐる。

kuurenai

60

悲調

田中克己

長良川ながるる水の清かりしわがわかき日はいづちゆきけむ
 夜のゆめに出で來しなればわがたを見ぬさましては高くわらひき
 海の上に沈む日みつめるしわれのかたへにひとはるざりしごとし
 玉簪花まつり花かざしみんなのまちにあひたるをとめどもはも
 甘きおもひ粉と碎きてそむきゆくをみなのがをなれもちしか
 そむかれしかなしみ告げむとひとをなみたかのの山にわれは來にけり
 わがものならぬなれをこほしみ深山木の繁みのなかに涙おとすも
 御法なごりさくころはもたね棄てられし身はただ高野山たかののまをこひたる

長崎旅情

山口實

しらぬひ筑紫の濱のしらなみもあはれに見ゆと君に告げなむ
 朝さむく肌にし沁みる海風の吹きすぎとほる破風の門よ
 散りじりに別れて死にしましひの流ることく會ふ日もあらむ
 美少年天草四郎時貞もはかなき花のいのち散らしつ
 ロザリオの鎖のすぢに添ふ肌の愛かなしさよけふの君の美貌よ
 ただひとりさびしきままにたそがれの聖母の寺の鐘ききにゆく
 風すさぶ阿蘇高原の冬の夜のしろたへの月も臉にのこる
 とこしへの曉ならむ川へだて山へだてたる野の涯に見ゆ
 圓光のかすかに差せるあけがたを聖者の列に入りたまふらし

朝あけのしばらく前をちよるづの鳥鳴き交すこは高山
口すすぐ山の清水の冷たきに身はすくみつつ朝を待ちたり
火ともえてさし昇る夏の太陽の影りもあらず雲海に照る
雲海の果なる峯にあらりたる日を浴びてわたる峯より峯へ
太平洋のはてにたなびく天雲のとはどほしけれ朝あけたれば
いかづちは下なる谿の雲海に鳴りわたりわが踏む岩もどろく
雲の海くづれ押しくる深谿のま上に立ちて叫びをぞ拳ぐ
くづれたる雲の峰またもり上りたち上りつつ雷と寄せくる
谿に降り峰に降りくる大粒の雨横さまに肩をぬらせり
眼の先も見えずなりつつ降りしきる雷雨の中に立ちすくみつつ
たちまちに川と流るる山みちを駈けてくだれり雷雨來ぬれば
雷雲はたちまち峰をおほひたりすさまじき午後の山かけくだる
耳も裂け身も砕けよといかづちの狂ほふ山は猛き雄の山
行者らが白き衣をぬらしつつ悠々と巖をふみてゆくなり
いかづちのほろびざるべし山々はとどろきあひて雨の中に消ゆ

二十才 西 保 惠 以 子

平凡に商家の妻となりゆくを定めたる日は泣きにけるかも
唯一人を守り生くべき諦観を貞女と云ひしながき歴史は
愛情はながく変らぬものとしてうたがはざりし二十才経るまで
わが孤り嘆けば君もまたひとり寄り來て夕べの野にむつみあふ
海荒れの磯にくたくる波がしら妬むかなしき性をもちしも
南紀の海のさ青におとらじと君が眼にもゆる炎ぞ

潮 風 伊 井 玲 子

うつろなる心をもちて海原の浪のよせ來る斷崖に立つ
海風きて海の青さにあこがれし若き心はその中に燃ゆ
しづかなる天地と思ひただひとり磯邊に立ちて落日を見る
わがいのちきみがためにぞもえつつもなほこがるるか群青の海に
ゆふさればほのかにほふゆふすけの黄なる花にも人のこひしき

大 嶽 山 難 波 礼 二

この道に來るべき人ら夕赤き陽にふれ遠き岨道を曲れり
既に實を結びてなほも花ひらく夏草ぞわが眼にたちける
雲のなき天の退きへに大嶽の全けき山は今ぞ見えわたる
夏を啼く鶯の声ききつつも厳しと見ける峰のしづけく
立つ尾根の足も見れば異なる山また山の北につらなる
あかときの光ながれて山の上にわれらの顔は然か見えそめつ
めつ朝を啼き越ゆる鳥が音いく声ぞ見るまに山のいろ動きいづ
南より流れ來れる白雲のをりをりひらく青空はあり

白 鷺 城

觸れつつは空に白雲のしづかなる五層の天守ゆゆしみ思ふ
唐破風千鳥破風と空に冴え今をたぐへて白聖ひらめく

あ る 日

手にのせしみかんの重さ限りなく豊けきものに思ひつながら
あつかりし一日すぎにし宵やみにわが侘住のあらはなりけり
青葉木に風滿つる夜半のひそまりや孤独の中に吾を育てむ
相さかり遠く住めればなほさらにはそきいとしききづなと思ふ
眼の下に霽にけむれる街ありて港の船ははまだ動かす

長崎巡礼 ……山口実の歌について……壑 中 清 市

今を去る四世紀の古、西邊の地に來り 國とぞ嘯歌しつ住みつく崇高さは、
榮へた宗教は、その苦難の歴史を残り たとふるにしくはない。
つつ、よく東支那海の波風に堆へて來 かの天草の一木一草に、かなしみの
たのである。美しいかな人の心は。果 涙をそそぎ、原爆に晒された長崎の
しなき夢を求め、苦難を愛して十字架 聖堂に拜して、夕日のかけ、色ガラス
上の聖像にひざまづくとき、身にしみ に染まる己が手にそぞろ寒さを禁じ得
わたる鐘の響に胸をどらせた老いや若 なかつた青年、山口実であつた。
きは、いまま邊土に生きて、ここを天

この夜明けなば明日は伊万里にかへると云ふ女と酔ひてかなしみは
なし

この作家の心底に流るかなしみは抑すべくもない、その安らかな
歌ひぶりの中にこそ、とどめ得べくもない激しさのあることに今さら
ながら驚きの眼をみはつて余りあるものがある。実に長崎は彼のかな
しみの在処であつた。

彩玻璃のその月夜は枯れし葉をしきりに降らしたしづもりぬ
うす絹をつき破るがにせつなくてきのふもけふも母戀ひまざる
静と動と共にあり、動をうたひて静に、静をうたひては動に存
することの作家の苦しみを彼は一身に秘めて、この現実をふみしめて
ゐる、しかもその優しさは、本土古来の風格と海を越へて來た白亜の
文學の艶めきを兼ね備へて淺からず、彼をきて有らざるべき独自の
風貌の歌聲であり、聲なきルネッサンスを叫びつつけて止むことを知
らない

色硝子に隈なく照れる月かげを見をさめてひとり石坂くだる
嘆きつかれしわれの眼の前にさまる蒸汽機関車の大いなる車輪
ゆふぐれの国際基地に立つことも切なきわれの悲願のひとつ
しるがれのつめたき神の御像もアンジュエラスの朝の鐘ききたまふ
ロザリオの鎖のすぢに添ふ肌の愛しさよけふの君の美貌よ
美少年天草四郎時貞もはかなき花のいのち散らしつ
しかして彼の美しい青春は国土の果に沈む夕日の色よりも、あかき
を極めたのである。

しらぬひ筑紫の浜のしらなみもあはれに見ゆと君に告げなむ
遙かなるひととおもふに身に添ひてよみがへるゆゑにひと日嘆きぬ
大浦のオランダ坂のあさかぜに君がおくれ毛もさやに吹かれつ
雨後の港の笛をききつつ君のむく林檎の紅き皮は眼に沁む

燃ゆるがごとき彼の瞳は、また細やかに現実をうつしてあます所が
ない。更に又現実の後に大いなる影を見ては、作品の深さのほか
り得べくもない。しかもその作風のさばやかさは、彼の人間そのもの
である。常に偽はることなく、飾ることなき彼の道は、止まる所を知
るよしもなく、常に艱難の道を突破してゆく、す太さを持つてゐる。
あまりにも地味であり、手堅い作風である所に、現実をふみ越へた彼
の姿があるのである。

われの瞳は坂の上なるひとつ樹を片照らす紅き燈にとどまりぬ
消ゆるがに心せつなくもだゆるを消ゆるにあらじこの霧の夜に
ほとほとにせつなくなりてトランプのクイーンの札にわが涙落つ
サンタ・マリアをとなへつ残せし足のとどころ、一つとして彼
の思ひ出ならざるはない。

薬園をくだり來りて夕霧のながれるさむき島原を去る
天草の崎津みなどに寝し宿のふかふかと更けし夜の紺の水
亡き父の寂しき聲をおもひいづ二十年を経しこのゆふぐれに
旅情切々たる長崎の調べは浦上天守堂の鐘のひびきの永遠に絶へざ
るに似て、天地の間に漂ふのであつた。

秋たけし山国川のほとりなるほこりまみれの菊を手折りぬ
船のマストにかがやくけさの万国旗はためく色なほ見んとする
さびしさを遣らふ方なし遠流のほのかなる藍もまぼろしにして
彼の行脚は西に東にはた南に、ちなみに信濃の歌をとり出でて山口
実の風貌をうかがふの資とせむ。

沓掛の愛しき女のおもかげは佐久の日ぐれの燈にうかがひつ
はなやぎし一夜の情は沓掛の曉のさ霧とはれわたりゆく
胎動をわれに告げたる女ありてこの朝空の美しきかも
しづむ陽はゆふぐれなぬにかがよへばいづこの山の秀がひかるべき

ただ彼の信念とせる短歌の正しき道なるものによつてうたひあげて
ゐる。赤や黄に染まるべき彼ではなく、彼自身の情熱の趣くにまかせ
て、ひとり長崎の山の稜線に沈む目をかなしみ、はかなんでゐる姿は
さすがこの国土の果を思はせるものがある。ここに、高く評價さ
るべき彼の大作を成し得たことを、たたへ仰ぐものである。

生れて成人した。

カメラとか望遠鏡とかそんなものを透して見た風景でなく直接的なものである。われわれが旅に出て、ちよつと見たと云つた具合なものでなくて、天然の風のそよぎが身体に傳はるやうに肌に、ちかちか染まつてしまつてゐるのである。彼はそこで彼の性格を形つくる年齢まで暮した。しかしながら彼は反逆したのであつた。自然に添つてしづかに老いゆく日まを田園に生活することに反逆したのである。こんな性格をも彼はそなへてゐる。

このことは彼の人生において、一つの大きい出来ごとであつたと僕は思ふのである。即ち結婚を契機としたそれに伴ふ心事によるものである。まだある。田園の風光を愛せず都會の風光を愛する氣持からである。このやうに僕は壘中君を眺めてゐる。

彼の人生観や恋愛観やさまざまのものの見方についてはあまり詳しくは知らない。しかし彼の歌にあらはれてくる感情は、たとへそれが、都會の風景や、汽車や、煙突や、妻の横顔や、湯とか、又はかなしみとかよるこびの風景を歌つてゐるにしても、ちよつとみつけてみると、やはりそれは田園の郷愁に似た山や川の呼吸なのである。

僕は彼のひとつの歌については余り批評しない。根本的な彼の希求する方向を見ようとしてゐるのである。こんな意味で最初に掲げた歌は偽りなく彼の姿が彫刻のごとく出てゐると思ふのである。
みどり児のをどろきをまづ驚きて吾子に見しむる犬馬のたぐひ

日は眞晝ポブラ並木の影は濃し深きまひを秘めてゆくとき
大勢の産婦の中にうち臥せる妻の白衣に涙おちぬれ
流れに沿ひて秋は七つの色に咲く花をもとめてゆきし
日の夢

こんな歌も僕は好きである。しかしこれらの歌以外に余りにも平面すぎる歌が顔を出す時もある。だがその時なりの大きい息づかひを見逃してはならない。
壘中君よ。故郷のあの空の色を眺めて見給へ。そしてしづかに眼をとるのである。それだけでいいのです。

——良い歌はそこから生れるのです。故郷を愛する氣持は実に、妻や幼児を愛する氣持なのだ。和歌は何も手あたり次第にうたはなくてもよかつたのだね。ひとつのものをじつとみつけて歌い上げた。そんな歌人を愛するさういふ点からしても、壘中清市君も僕の愛する歌人のひとりだ。(二六・九二〇夜しるす)

くれなる雜記

今度「くれなる叢書」として、壘中、山口、難波の作品集を皆様の前にお示しすることになりました。これについて私たちは、今何とも申しあげざる氣持はありませんが、ただお目にさだまるものありとすれば幸ひと念じ、次の歩みを確かめるの資として、ここに上梓いたします。田中克己先生の一文に読みとらるべきものあるをひたすらに信じてゐます。

©印刷のおくれました事幾重にもお詫びします
印刷所より

くれなる叢書

壘中清市
歌集 天 雲

A5判変形限定版
頒 價 二〇〇円

山口 実
歌集 長 崎

A5判変形限定版
頒 價 一五〇円

難波 礼二
歌集 朝 鳥

A5判変形限定版
頒 價 一五〇円

吉川仁詩集

陸

草野心平序、丸木位里装禎
B5判本文模造紙美装函入
限定版 定價 二〇〇円

爐書房刊行

KURUMAI

61

富士山頂

壘 中 清 市

天にぎざす富士十合の坂道に吐く息白し杖も冷ゆるがに
頂にいまぞいたれりさしのほる大朝日子まづ伏しおがめ
ともあれ富士ただきの奥宮に冷えとほりたる手をあはすなり
頂の厠に入りてこごる身に安堵の息をつきにけるはや
曉の富士のおもてはべにがら色に染まりて立てり雲をふまへて
凍る手ににぎりしペンををぞらせて初富士便りつづりけるかも
うつそみのあまりに小さきおぼゆれば夏雲をよぶ富士の残雪
富士が嶺のいただきの岩ふまへつつ雲みれば雲のかしこきろかも
浮世をばとほくのがれて來ぬるかな天上風は巖に鳴るなり
富士が嶺は若き雄の山やま肌の荒きをふめば身はひきしまる
久方の空の中に立つなればもの云はざるもかしこかりけり
空の上なればはけしく風の鳴る清淨富嶽に目をむかへける

悲 歌

田 中 克 己

かくばかりかなしきものと知るときしなれ死なざしと心きまりぬ
秋の星またたく空の下とほく疲れてわれのゆきかふころか
海わたりデウスの教とよきに來しひとはあれどもなれはまた來じ
とつ國の人らあつまり作りおきしのにたがはむわが心ざま
山ひだの美しき日ははるかなるなれをおもひてひたになげかふ
アモールの神を追はむと黒き幕あぐればかなし夢はさめたり

くれなる 第六十一号 印刷所 株式会社朝日堂 印刷者 奈良縣宇陀郡大宇陀町 吉川清司 發行所 大阪市東成區大今里北之町五ノ一二一 くれなる發行所

さやさに風わたるとき曇り夜の星の咲きを聴き給へかし
 静かなる群星なればつきつめて思ひしこともはかなく見ゆる
 信じられずなりゆくをどうしようもない仰ぎる星空のあやしき魅力
 こぼろぎの運えまきりゆく音に觸るる夜気のかそかなふるへを感ず
 雷雨やみスカートの白き裾をふく夜風が已に運びこし秋
 身に余る悲しみ幾つ超えて来し思ひが我を燃えしめぬなり
 しづかにも日々あるごとし諦めに似たる思ひか我を支ふる
 昨日がいつかわが翳となり新しく萌え出づるものを抑へむとする
 自らに背きてなほも堪ふべきか一言はいたく胸刺しにけり
 たまゆらをよぎりてゆきしものや何やさしく目見はひらかむとして
 目の限り雲連なれりねむの葉のそよぎより今日は始まらむとす
 ひびかふは瀬の音のみぞここにきて雑念もなく茶をたつるなり
 舟に坐し流れを汲みて茶をたてぬ永久なる瀬音奏でられつつ

妹、秀子を憶ふ

靈かへる盃蘭盆會なり風たてば亡き妹の思ほゆるかも
 みまかりて幾年ならむ妹と呼ぶさへ今は遠かりにけり
 稚くして逝きし子なれば思ひ出の何一つなし面影さへも
 妹よせめて今宵はかへり来よひとりの姉が待ちゐるものを
 ほのぬくく黄泉の國より吹く風か小さき秀子のあんよを運べ

相難波礼二

大輪の黄菊の辨のもりあがる富貴の相に觸れむとは思はず
 自嘲もはや半ば慣習めきたりき秋が来ぬれば徐々の深まり
 表情を鮮しと見きは誤りにて絶望の底の粗き意志表示
 皮はぎて道ばたに置く杉丸太白きに照れる秋陽なほ暑し
 うつろさの果に言ひたる戯言のわれにもあらぬ鋭さもちみき
 風こもる山ふところの竹みてわが民族の悲しみを歌はむかな
 しなへたる雑草よせて焚く煙一きは燃えて低く地を這ふ
 根底に定まりやらぬ思想もちてどん栗の落つる音をききしか

浪速西保恵以子

むらさきのながきたもとのいとしくて浪速忘れずわが里なれば
 長堀の川にネオンのゆるるさへかなしや乳母は死ににけるかも
 浪速にてチャルメラ聞きて泣かれけり吾は異郷の人戀ひてあれば
 川に浮くネオンの街の商人の娘は娘ながらに惱みをもてり

山蔭だより

燈台を守るをこの若ければ岬に逢ひて切なかりしか
 三朝なる女將の悲話もかなしやと聞きつる夜半にしぐれふる音
 吾ひとり旅来しゆえに酔ひ痴れて君なく夢にさめておびへぬ
 はせ赤く色だつころの旅の日をかなしと嘆く吾若ければ
 病み果てて吾が死ぬ日まで西の海この郡青を戀ひてありなむ

折々の歌山口實

大菩薩峠に立ちし夕虹を見しと告げなば君はあはれむ
 終列車発ちたるあとの木曾川の小さき駅に雪ふりいでぬ
 ダイヤモンド・ルビー・サファイヤ・エメラルドのかがやきの中に君
 の瞳はある
 せつなくて何も言はずに瞳に一ばい涙を秘めて別れ来にけり
 晩春の風あらく吹くゆふまぐれナボンオン傳記われ乱讀す
 金らん緞子の帯しめられて嫁ぐ日のせつなき涙見え来るかな
 しづかなる秋の風ふく濱に來て熱きなみだをながしてかへる
 愛染のねがひむなし泣きながら野をゆけば雲に日は落つるかな
 泣きながらわれにつきくる君見れば女優のごとき瞳のなみだかな
 さはやかに心は澄みてくもりなし文金高島田の君の寫眞

詩と歌について 田中克巳

ごこでも詩人として紹介され、歌人としては紹介してくれ
 ない。それにも拘らず私自身は歌人でもあるとうぬぼれてお
 る。しかし詩人と歌人にちがひはあるのだらうか。詩と歌と
 にちがひはあるのだらうか。現実にはちがひはある。詩はい
 ま佐藤春夫先生など少数の例外を除いて、リズムをもたない
 内在律があるのだといふこれも少数の人がある。ポエジーが
 あるから詩だと多数の人がいふ。ポエジーとは何か。これに
 ついては多数の者が議論の最中である。歌壇ではどうだらう
 私は歌人と稱したが、歌壇には入られてもらつてない
 い。そのせいもあつて詩壇よりも一層この点に關しては無知
 である。しかし三十一字がリズムを失つてポエジーだけにた
 よるとなると、詩との區別はどこに置くことになるのだらう
 か。もうあの調べをもつた日本独特のポエムはなくなりかけ
 てゐるのではないか。調べのない歌は三十一字といふ制限が
 あるだけによけいに作り易い。もつともこの三十一字もすつ
 と昔から三十一字以外といふきはめて寛大な規則にとつてか
 はられてゐる。中国の七言絶句や五言絶句が二十八言、二十
 言と、一言のはみ出しをも許さなかつたのとは大した相違で
 ある。さてポエジーは内に必ずあるか。ためしに私は枕許の
 本を開いて見る。

りぬ

「學問は學問に精進する人物の精神を練磨する」と書きあ
 りぬ
 字数ではない——音数を勘定すると三十七音になつたが、
 この頃それくらゐのハミ出しは問題でないだらう。最後の六
 音を附け加へたおかげで、三十一字からはみ出したが、豪勢
 に歌らしくなつたからふしぎである。自畫自讀ぢやないが、
 かういふ中世風をモラルに手をあげてゐる作者とも見られ
 るし、心の中ではげいれツスタンスをもつてゐて、その中
 に何か実行にうつさうとする作者の決意をよみ取ることにさへ
 も出来ると思へる。かういふ感じを起させるもの、これこ
 そ本當の詩だ、従つてこれは歌であるさ、いひたい自信さへ
 起つて來さうだ。

いさゝかアレゴリーめいたが、私はやはり山中で、または
 市井で低く吟じてゐたい。聲低く、しかし調べは高くである。
 その中間をこの二三年來、私はもつてゐる。「くれなる」の同
 人たちである。今度「くれなる」叢書として莖中、難波、山
 口三氏をろつて歌集を出すこととなつた。いづれも調べの高
 い歌ばかりである。社會不安も革命への熱情も歌つていない
 とそしめる人はまづないだらうが、この人たちの調べに對する
 苦心は案外くみとつてもらへないのではないと思ふ。前説
 ひなかれて一言する。
 とこしへの曉たらむ川へだて山へだてたる野の涯に見ゆ
 (山口実)

莖中清市君の横顔

山口実

僕の愛する莖中君の歌を若干してみよう。
 言葉なく落葉のみちを幾曲り妻子とくれば激つ瀬の音
 秋の風いたくな吹きそ齒もまだき口あけて泣く吾子をい
 だけば
 ぬば玉の夜半の枕にこぼろぎのなく音はかよふ母なるくに
 あをあとと澄みきはまれる山の上の空にはかへれ稚きおも
 ひで
 右の歌は僕の最も好きな歌なのである。このしづかでやは
 らかく、ふくらみのある歌のしらは、莖中君の性格がその
 ま、出てゐるのである。彼の生れた大和の朝倉村は良いとこ
 ろだ。細長い村で、美しい牡丹で有名な長谷寺もその村の近
 くである。青いならか山山はしづかに自然の香りを吐い
 てゐるのである。小川があり、野っ原があり、そして牛だの
 馬だのが居て、丁度子供の画く風景画のやうだ。彼はそこに